

ベル君が女の子にセクハラされまくるだけの話

葵 α

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いつものみんなよりちよつとだけスキンシップが過剰なダンまちの世界。

※あくまでスキンシップが過剰なだけなので必ずR18シーンが入るかはわかりません。（というのもこの設定だと一回じゃそういう展開に入らなそうな人もいるため）

目次

聖火の主神

1

豊穰の店員

7

「ひっ、かつ神様っ、んっ、神様ダメっ、ダメです!」

「ん〜?……んふふ〜?べるくん〜」

「神様!あっちよっ、お、起きてください!」

ベルが呼びかけている間も弄る手は止まらない。寝ているはずなのに中指から小指を器用に使つてベルの陰囊を、残りの二本で寝起きのため屹立する陰茎を刺激し続ける。

寝ている神に自身の『男としての命』をしつかり掴まれている緊張感と、やわやわと揉まれながらギユツと強く挟まれるという、えらく器用な彼女の細い手指が生む快感によつて、「朝だから」なんかじゃ言い訳できないほど、陰茎は硬く大きくなっていく。

「ふっ、んっ、か、神様!お願いします!起きてください!」

「ん〜ん〜ん〜!!!」

「うえっ?!神様?!」

ベルが刺激に耐えつつ、どうにかヘスティアを起こそうと呼びかけると、ヘスティアはうるさいぞ、と。まだ起きないぞ、と主張しながら身じろぎする。しかしその行動は更にベルをピンチに追い込んだ。

「み、見えてます神様!神様?!」

「ん~~~~~!」

激しい運動をしたら溢れてもおかしくない程、布面積の小さいその服から、大きな胸がはみ出る。気づいたらベル自身のシャツも胸のあたりまでめくれ上がっていたので、大きく柔らかい彼女の胸は、直接腹へと押し付けられることになった。当然、健全な少年であるベルの興奮は更に増すことになる。

「はっ、あつ、こ、こんな柔らかか、じゃなくつて!」

「ん~~~~~んっ!」

「あっ♡」

そしてトドメだ!と言わんばかりに、今まで焦らすように陰茎の根元と陰囊を責め続けていた指が、最も敏感な亀頭へと移動する。

自分のものとは思えない声が出たベルは、しかし射精だけはなんとか我慢した。先走り汗が次から次へと出てきて、手淫の気持ち良さはどんどん増していくが、敬愛する主神をなんとしてでも汚さないように。そして、

「ぐっ、うあああああああああ!」

「んがっ!」

彼女を起こすことを諦めたベルは、レベル二の全力を持って、上下入れ替わる。

それによって手からは逃れることに成功。しかし、最後の誘惑が彼に襲いかかること

になる。

ベルがいなくなったことによりソファに落ちたヘステイアは、腰を突き出すような体勢になり、ヘステイアの上に、後ろに回るのが精一杯だったベルと後背位のような形になる。

おまけに、股間の布は先程の身じろぎでずれていたのか、ヘステイアの秘部は丸見えで、当然ベルの男根は大きくなったままである。

「はっ……はっ……」

「……すー……すー……」

正直、ベルは限界だった。はじめて受けるレベルの快感を、今までで最大の勃起を、ギリギリ、なんとかギリギリ耐えることができたのはひとえに、彼女が、汚してはいけない、敬愛する主神だから。

しかし今、ベルが少し腰を前に進めるだけで、挿入る。

「……ぐっ、……はっ……はあっ……」

自分以外の誰かに勃起したモノを触られたのでさえはじめてだったのだから当然、ベルには性交の経験などない。

だから今、ベルを悩ませているのは雄としての本能。バキバキに勃ったイチモツを、目の前の肉壺に押し挿れ、ぱんぱんと腰を打ち付けて、膣内をぐちゃぐちゃにかき混ぜ

る。そうすると最高に気持ちよく吐精できると、雄としての本能が言っている。

「……………っはぁー、っはぁー……………っはぁー……………」

「……………すー、すー、すー」

頭の中の善性が、寝ている女性を襲うなんてと言えば。

悪性は、据え膳食わぬは男の恥じやと囁く。

神様を裏切ることになるぞ、と言えば。

でも、きつと神様なら許してくれる。

「……………ふっ、ふっ」

ごくり。音を立てて睡を飲み込む。

結論は出た、出てしまった。頭の準備は完了した。

最後は心の準備だ。きつと一秒もせずに完了する。

だから、その瞬間。待ちきれないぞと言わんばかりにヘステイアのお尻が近づいてきたことで。

心の準備ができる前に、粘膜同士が触れ合ってしまったことで。

ベルは正気を取り戻す。

「ひっ、あっあっあ、あ、あ、あ、す、す、すいませんでしたあああああああああ
あ!!!」

正気を取り戻したベルの行動は速かった。ヘステイアから急いで飛び退くと、勃起したまま下着を履き直し、そのままの勢いで出かける支度を始める。

「い、いつてきまああああああす!!!」

再びレベル二冒険者としての全力を用いて支度を全て終えると、目を合わせられないのか姿を見ず、言葉だけを残してホームをダッシュで出て行った……………。

「……………ぐううう。あと、もーちよつとだったのに！本当にあとほんのちよつとだったのに！」

なお、ベルが去った後の部屋からは、悔しそうな声がしばらく続いていた。

「起きてるのがバレてもいいからもつとおもいつきり動くべきだったか！もー！ベルくんのヘタラーー！」

豊穰の店員

ヘステイアから逃げたベルは、興奮が冷めないままホームを出たため、外で処理をするわけにもいかず、結果未だに勃起が収まらないままだった。

不幸なのか幸いなのか、若さ故の持続力と、下着を履いた時点から大きいままなので、上向きに固定することでぱっと見では異常がないようになっていたもの、勃起したまま街中を全力疾走。変態と言われてもしょうがない事をベルはしている。

「あつー！ベルさん！」

「!!!シ、シルさん！」

こちらに気づいて手を振りながら声をかけるのは、いつもダンジョンに潜る際にお弁当をくれる酒場『豊穰の女主人』の店員。銀髪と可愛らしい笑顔が特徴のヒューマン、シル・フローヴァ。

「おはようございます、ベルさん。今日はとつても急いでますね？」

「す、す、すいませんシルさん！お弁当ありがとうございます！それじゃー！」

「………待って、ベルさん！」

行つてきます！と言う前にシルに呼び止められる。できればシルに変態だと思われ

たくないのなでなるだけ早くここから立ち去りたいのだが、流石に無視するわけにはいかない。

「ど、どうしました？」

「……ベルさん。何か隠してませんか？」

そう、彼女は異常に勤が鋭い。ベルが嘘をつけない性格なのもあるが、彼女相手に隠し事は通用しない。だが本当のことを正直に言うわけにもいかず、無様な抵抗を繰り返すことになる。

「な、何かってなんですか？」

「……特別何かあるわけじゃないですけど、何か……」

「(良かった) 何も無いですって！」

「本当ですか？」

「本当ですー！」

苦しい抵抗ではあるが、しかし決定的な証拠があるわけではなく。なんとか切り抜けられそう、と言うところで彼女の顔が訝しげなものから真面目なものへと変わる。

「……ベルさん。無理してませんか？例えば、体調が悪いとか。……私、他人のために行動できるベルさんのこと、好きですけど……それでもやつぱり、心配なんです」

「シルさん……」

なんということだ。僕がくだらない隠し事をしたばかりに、ここまで心配させてしま
うとは。

でも、コレだけはどうしても言えない。どれだけくだらないことだろうが、心配させ
てしまうのは心苦しいが。

だからこちららも、出来るだけ真面目な顔で。シルさんが安心できるような声色で。精
一杯返事をする。

「……シルさん。大丈夫です。本当に、なんでも無いんです。シルさんが心配するよう
なことじゃ、決して。約束します」

「ベルさん……………あ♡」

「え？」

シルさんの顔が真面目なものから、今度は急にいたずらをしかける子供のようなもの
にかわった。

何故だろう。直前、視線を下げたような気がしたが。

「……………ふふ♡ベルさん♡そういうことだったんですね♡」

「あ、あの、シル、さん？」

「ベルさん、どうぞこちらに♡お時間は取らせませんから♡」

「シ、シルさん!?あの!?シルさーん!」

言いながら、手をとって路地裏へと連れ込まれる。
そう、彼女相手に隠し事は通用しないのだ。

シルの手によって下着ごとズボンを下ろされると、一度衣服に引つかかったあとポロ
ンツと弾き出されるように、大きく硬い男根が姿をあらわす。

「……………わっ、すごい。ベルさんの……………おつきい♡」

「……………シルさん、ダメです」

「ふー♡」

「ひゃうっ」

先程限界といってもいいところを我慢してそこからまだ射精していないソレは、息を
吹きかけただけでもビクンと大きく跳ねる程敏感になっていた。

シルは、ベルの耳元に口を近づけながら、右手でそつと優しく指を這わせて徐々に
握っていった。そしてそのまま、優しく扱しきながら耳元で囁く。

「……………何がダメ、なんですか？……………こんなに大きくしたまま……………街中を走り回って私の
ところまで来て……………ベルさんの方がよっぽど、イケナイことしてるんじゃないですか

……?」

「んっ……ふっ……それは……くっ」

「それに……ベルさんが本気で抵抗したら……私なんて絶対敵わないのに……こんな路地裏までついてきたってことは……期待、してたんじゃないんですか?」

「……ふっ……ふっ……ふっ……ふっ」

シルの言葉責めと手扱きによつて、ベルの頭の中は気持ちいいやら情けないやら、パニックになっていく。やがて、目に涙が浮かびそうになったところに今までの優しい手の動きとは一転。激しく、搾り取るように強く上下に動き始めた。

「……なんて、冗談ですよベルさん。ホームにはヘステイア様がいますし、ベルさんが私を傷つけて振りほどくなんてこと絶対にできませんよね。ごめんなさい、ちよつと調子に乗りました♡」

「シ、シルさん!んっ、わかりましたから、手を止めてください!うぐっ、シルさん!」
「でもやっぱり、私に頼って欲しかったなあつて思います。こういうのつて、近所のお姉さんにかしこめてもらつたりするじゃないですか。……実は私、ベルさんよりちよつとだけお姉さんなんですよ?」

「シルさん!?!」

「……敏感すぎてちよつと辛そうですね。……んむ……んむ、れう……」

「っあ、はっ、あっ」

ベルの反応を見て何を思ったのか、彼女は手を動かしたまま唾液を垂らした。ベルの先走りとしルの唾液が混ざり合い、ぐちゅぐちゅといやらしい音を立てながら快感が増していく。

「……ね、ベルさん……私、こういうことするの……初めてなんです……♡上手にできてますか?……気持ちいいですか?……ベルさん♡」

……この女性ひとはどうしてこんなにいやらしいというか、いかがわしいというか、エッチなんだろうか。すぐさま耳元で囁くのに戻ったシルを見て思う。反応を見ているのか、手は亀頭を中心に休むことなく弱点を責め立て続け、囁く声は全てベルを墮とすためのもの。

「……立っていられますか……?大丈夫、私につかまってください……ふふ♡どこに触れてもいいんですよ……♡」

「ベルさんの耳……とつても美味しそう……♡ん、ちゅ、はあ……れる……はあ♡」
「射精でちやいそう……ですか……♡……いいですよ♡だして♡射精して♡」

ラストスパートだと言わんばかりに、彼女の手の動きは更に激しくなっていく。ぐちゅちゅちゅちゅと先走りが濃く泡立って、細い指と手のひらに強く擦られながら陰茎がビクビクと跳ねる。

そう言いながらシルは小さい口をできるだけ大きく開けて見せる。口の中は綺麗で、それは全て残さず飲み込んだことの証明。おまけに目を閉じて口を開ける彼女は、とても情欲を刺激する。

「そ、それは……その、とても、あの……エッチで、気持ち良かったですけど……でも」
「……ふふふ。正直ですね、ベルさん。大丈夫ですよ、ちよつと喉に引つかかる感じがしたけど……ベルさんの、美味しかったですから♡」

嗚呼、なんて淫狼なのだろう。まるで淫魔だ。このままではまた、シてもらうことになってしまう。ここにいるのはとても危険だ、というか冷静に考えてみたらここ路地裏だ。デジャヴを感じるが急いで衣服を直す。

「あつ、もう行くんですか？」

「すつ、すみません。リリとヴェルフが待っているのですっ！」

仲間のことをダシに使ったようになってしまったが、これ以上ここには遅れてしまうのも事実なので積極的に使わせてもらう。

「じゃ、じゃあ」

「行つてらっしゃい♡ベルさん、また……しましうね♡」

「は、はひ!？」

「今度はちゃんと、口にキス……させてくださいいね……?」

「~~~~~!!!」

声にならない叫びをあげながらベルは逃げ走り去って行く。どうせまた明日お弁当を持つていくため、豊穰の女主人に来ることになるのだが。

「……ふふ♡からかいすぎちゃったかな？」

「アーニヤとクロエに気づかれないうちに口と手を洗わないとね。……………本当はもつと、余韻に浸ってたいんだけど……」